ＳＭＣ金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain　SMC 豊島 健治

「銀行取引」ここが知りたい・そこを聞きたい(№1)

――――――――金利引上通告――――――――

取引している都市銀行が金利引上げを通告してきました。引上げ巾は０．８７５％ということです。我が社の弱みにつけ込んできているようで何か釈然としませんが、応じざるをえないでしょうか？　（千葉県 建材業）

――――――――――――――――――――――――

◆最近、大手銀行を中心に、盛んに「信用リスクに応じた貸出金利」というようなことを云っています。要は、今まで「信用リスク（倒産して回収不能に陥るリスク）」より低い金利を適用してきたので、これから本格的に貸出金利を引上げるということです。

◆欧米の金融機関と比較して日本の銀行の利鞘は小さく、利鞘改善が日本の銀行の課題だということで、「貸出金の利引上げを」という論理になるようですが、果して納得できるでしょうか。問題は二つあるように思います。

◆一つは、日本の銀行の収益力が弱いのは、銀行の経営者の経営力がないからであって貸出金利の低さに結び付けるのは筋違いであるということです。それは、利益が出ないのは商品価格が低いためで、顧客である消費者が悪いと云っているのと同じです。そんなことを云っている商人はとっくに潰れているのが現実の厳しい世界です。

◆もう一つは、そうした「通りの良い原則論」が経営失敗の隠れ蓑に使われているということです。確かに、銀行は「信用リスクに応じた金利適用」を行う必要があります。それは当然のことだと私も思います。しかし、現在起こっているそれは、膨大な不良債権を積上げてしまったツケを一般顧客に廻そうとする行動と受取られても仕方ないと思います。

◆銀行経営者の大半は経営に失敗したのです。一般企業なら倒産です。何故失敗したのかはここでは云いませんが、そのことの認識とケジメなくして、何を云っても虚しいということではないでしょうか。銀行機能が正常に働いている時、「信用リスクに応じた金利」と云い出せば私も納得しますが、失敗のツケである不良債権処理に使われるのが見えみえの時には「それはないでしょう」と云いたくなるのは当然です。

◆現に目の前で演じられている「大手問題企業救済劇」は、債権放棄と債務株式化という名のモルヒネ注射を打つという話です。金利を貰うどころの話ではなく、元本の回収すら断念しているのです。そうした企業に、昔から、中小企業と比べると遥かに低い金利で巨額融資を続けてきた責任は何処へいったのでしょうか。それには頬被りして、今まで銀行の利益の源泉であった中小企業に金利引上げを断行することなど、感情的には勿論、倫理的にも許されないように思います。

◆しかし、現実はそうした議論を展開しても「蛙のツラに……」でしょう。銀行は結論として上げにかかっているのですから「虚しい抵抗」となってしまいます。そこで、現実的対応として、（１）前述のような問題を話題に出し議論する、（２）我が社への適用金利の根拠（銀行内の格付けや融資方針など）を聞く、（３）引上げによる影響が金額にしてどの位になるかを確認する、（４）それによる収益悪化は銀行への負担増加に伴うものであることを了承させる、（５）その上で「銀行取引約定書」の金利条項はどうなっているのかを説明してもらう。その回答次第によっては、応諾を留保するということでしょう。

◆私も結論的には「応諾止むなし」と考えています。しかし、簡単に「はい、分かりました」と云ってはいけないと思うのです。そして引上げ巾の縮小、引上げ次期の延期等条件交渉に持ち込んで行くのが現実的だと思います。貸出金利は貸し手・借り手の交渉によって決まります。その辺のつぼを掴むようにしてください。

§ お知らせ §

今回初めて掲載しました「銀行取引－ここが知りたい・そこを聞きたい」につきましては、今後皆様の疑問・質問に答える形で、適宜掲載してゆきたいと考えております。

日頃、疑問に思っていること、聞きたいこと、あるいは銀行の要請事項への対処など、どのようなことでも結構ですから、お気軽に豊島まで電話・メール・ＦＡＸ等でお寄せ下さい。尚、掲載の取上げ、時期等の決定は一任願います。

《複製・転載等はご連絡下さい》
TEL. 0438−53−6092 FAX. 0438−53−6096
URL: http://www.hi-ho.ne.jp/smc_toyo/　Email：smc_toyo@hi-ho.ne.jp